

異文化コミュニケーション

NEWSLETTER: Intercultural Communication

No. 30 February 1998

INTERCULTURAL COMMUNICATION INSTITUTE
KANDA UNIVERSITY OF INTERNATIONAL STUDIES
1-4-1, Wakaba, Mihama-ku, Chiba, 261-0014 JAPAN

〒261-0014 千葉県美浜区若葉1-4-1
神田外語大学・異文化コミュニケーション研究所
(Phone / Fax) 043-273-2324 (E-mail) icci@kanda.kuis.ac.jp

日本における 異文化コミュニケーション研究の課題 Blind Spots in the Study of Inter- cultural Communication in Japan

御堂岡 潔 (Midooka, Kiyoshi)

Due to the fact that Japan has been importing the concept of intercultural communication from the U.S., there are some problems left to be solved for furthering the study in this area.

日本における異文化コミュニケーション研究について、いくつか問題と感じていることがある。本稿では、そのうち、アメリカからの輸入学問であるということから派生してきた問題について述べてみたい。

基本的には、日本における「異文化コミュニケーション」研究は、アメリカにおける Intercultural Communication の研究が輸入されて、始まったものと考えてよいであろう。もちろん、アメリカのものとは異なる独自の論を展開している日本人研究者はいるが、少なくとも「異文化(間)コミュニケーション」という言葉は、アメリカの Intercultural Communication の訳語として、用いられ始めた。ところが、アメリカにおける Intercultural Communication と日本における「異文化コミュニケーション」とでは、背景に大きく異なる点がある。

アメリカの Intercultural Communication は、自分たちの社会が多文化社会であることを前提としている。国籍を越えたコミュニケーションもあつかうが、アメリカ人同士の異なる民族集団同士のコミュニケーションも多くあつかう。マイノリティ集団に属する人々が、平等な待遇を求め、自分たちの権利等を高めていくための学問という性格もある。

一方、日本では、98%以上が日本民族で同質性が高いこともあって、「異文化コミュニケーション」があつかうのは、ほとんど、日本人と外国人とのあいだの問題である。いまだに「単一民族国家」という言葉が、アイヌ民族などを無視して用いられるほどである。

このような背景の大きな違いを考えると、アメリ

カの Intercultural Communication で培われた理論や概念を日本の「異文化コミュニケーション」研究で用いることには、相当に慎重でなくてはならないはずである。が、しばしば、安易に援用されており、そのことが、まず、第一の大きな問題といえる。

第二に、アメリカの Intercultural Communication 研究にも言えることであるが、日本を東洋文化の代表、アメリカを西洋文化の代表としてあつかい、日米比較を東西比較の典型例とする研究がしばしば見られる。確かにヨーロッパから見て、日本は東のはてにあるし、アメリカは西にある。また、かつては日米の文化は大きく異なっていたであろう。

しかし、19世紀の開国の後、日本は欧米の文化の影響を大きく受けてきた。特に戦後のアメリカの影響が多大なものであったことは、論じるまでもないことであろう。そうすると、現在の日本文化は、アメリカ文化と似ていると考えるほうが自然である。

アメリカに数年在住しアメリカ人と中心に接触してきた人が、日本へ戻ってきて、文化の違いにとまどうというのは、しばしば耳にすることである。しかし、アジアの国々に数年滞在し現地の人々と中心に接触してきた人は、アメリカの場合以上に日本との文化の違いにとまどっている。現地の人々中心に接触するという例が、アメリカの場合より少数なので、耳にすることが少ないだけである。

また、日米比較の代表選手ともいえるべきものに、「アメリカ人は個人主義であり、日本人は集団主義である」という命題がある。日米だけで比較研究をおこなうと、この命題を支持する結果が得られることも多い。しかし、世界の数多くの国のあいだでのいくつかの比較研究では、「日本人は個人主義的なほうである」という結果が得られている。

これらの例からわかるように、安易に日米だけで比較をおこなって結論をだすのは、たいへん危険である。銘記すべきことといえるだろう。

なお、同様に大きな問題として感じていることに、「第三の文化」と「異文化」の混同、「文化の違い」と「ステレオタイプ」の微妙な関係、研究者の背景の多様さなどがある。これらについては、別の機会に譲りたい。(東京女子大学助教授、Associate Professor at Tokyo Women's Christian University)

江沢民訪米の意義 A Significance of Jiang Zemin's Visit to the U.S.A.

晨 光 (Chen, Guang)

Chinese President Jiang Zemin had an official visit to the U.S.A. in fall, 1997. At that time he showed his pro-American feelings, which was very positive because it was a sign of China's willingness to join hands and cooperate with other countries in the world.

江沢民は中国共産党内で、史上もっとも親米的なリーダーだと言われている。江沢民の経歴から見ても上述のことが裏付けられる。彼は1940年代に欧米文化の雰囲気をもっとも濃厚な国際都市、上海で大学教育を受け、大学卒業後、短期間ながら英語の教師をしていたこともある。彼の大学時代の同窓生の中には米国へ渡り、大学で教鞭を取っている人もおり、これらの旧友の受け入れにより同氏の息子がアメリカ留学をし、博士号を取得している。

当時の中国の政治的な理由により江沢民は旧ソ連へ研修生として派遣された経験もあるが、それは若いうちに彼が受けた欧米の影響と比べるほどのものではない。彼はリンカーンの名演説を暗誦し、マーク・トウェーンの実忠な読者だといわれ、また多くのアメリカの文学者と詩人について知っているが、ロシア文学に関しては、それほど素養があるとは思われない。

1997年秋、江沢民の米国公式訪問が実現した。それは、国家戦略上、米国訪問の必要性が生じたためでもあったが、江沢民個人の親米感情と意欲も重要な要因であると台湾のマスコミは推測している。中国ではリーダーの個人的役割を無視することはできない。今回の訪米においても彼の「親米」の一面を見ることができる。

訪米が決定してから、江沢民は万全に準備を整えた。アメリカ事情についてレクチャーを受け、その上、米国のPR会社に依頼して自分の服装や立居振舞いについて教を請うた。さらに英語で講演をするために、英語の特訓を受けた。それだけではなく、現地状況を把握し、友好ムードを作り出すために何十億ドルのミッションを持つ中国貿易代表団を事前に米国に送り込んだ。

10月26日、江沢民を乗せた飛行機がハワイの上空に到達した時、彼は思わずマーク・トウェーンのハワイを描いた言葉を口にした。アメリカの土地を踏むや、彼はまず「アメリカへ現地見学に参りました」と謙遜して言った。歓迎パーティーでも彼は踊り子たちと一緒にフラダンスを踊ったり、楽器で女主人の歌の伴奏をしたりした。このように中国ではめったに見られないフランクな一面を披露して喜び

を表した。

米国本土に入ると、江沢民一行がまず訪れたのは米国独立宣言をした由緒ある町、ウィリアムズバーグであった。この地は米国の「聖地」であり、町全体が歴史的立たずまいをたたえている。江沢民は植民地時代のジェファーソン愛用の帽子をかぶり、第3代大統領ジェファーソンを演じるアメリカの俳優から独立宣言や建国精神について説明を受けた。これを通して「米国への敬意」を最大限に表明した。

それから、江沢民はワシントンDCに入り、ホワイトハウスで国賓としての歓迎を受けた後、クリントン大統領と非公式会見を行い、寝室まで見せてもらった。ワシントン滞在中、「あらゆる側面を長時間論議した」首脳会談を行い、共同声明を発表した上、共同記者会見を行った。そこで米中両国は「建設的な戦略的パートナーシップ」を結ぶことを発表し、具体的には両国首脳の定期的な相互訪問、ホットラインの設立などを決めた。また江沢民は米国議会の指導者たちと食事をし、意見を交換した。

これで、江沢民の訪米目的は達成されたが、しかし彼はそのまま帰ることをせず、さらにフィラデルフィアに立ち寄り、自由の鐘と独立記念館を見学した。そしてニューヨークまで足を伸ばし、証券取引場で開場の鐘を鳴らした。またボストンにあるハーバード大学では講演を行った。さらに民間との接触を図り、各地で大企業や大学などを訪問したり、米中友好団体の招待を受けて講演をしたりした。最後の訪問地のロサンゼルスでは華人たちの主催する送別パーティーに出席し、11月3日に帰国した。

中国に「百聞は一見に如かず」という諺があるが、江沢民にとって米国での現地見学は憧れが現実になった以上の成果をもたらした。この8日間の訪問は首脳会談以外にまるで米国という博物館のすべてを見学したようなものである。それについて台湾のマスコミは次のように論評した。「江沢民は完全に『親善主義者』であり、すべて米国式でやり通した。そして彼は一流の礼遇を受けた。」ホスト側の招待に対して江氏もサービス満点の応対をした。ハワイでのダンスを皮切りにし、各地でユーモアを連発し、また英語でスピーチをした。デモや抗議活動に出会った時でさえ、笑顔を絶やさず、マスコミの質問に「雑音は聞いたが、抗議活動は見えなかった」と冷静に対応した。すなわち彼はできる限りのことをして米国への親善、尊敬の意を表明した。彼が「親米」だといっても過言ではない。

ここで強調したいのは、中国指導者の「親米」が決して悪いことではなく、むしろ重要な意義があるということである。長い間、中華思想の影響で中国人は「親」という字を「親しく、仲良くする」という中立的な意味で理解することができず、「従属」という意味で考えてきた。さらに今でも中国人は、近代史上外国の侵略を受けたために欧米諸国は中国に対して特別な負い目があるという独善的な意識を

持っている。従って「親中」はいいが、「親米」「親日」は売国だと激しく非難される。しかし、今回の江沢民訪米は上述した意識から解放し、「親米」という大胆な親善外交を行い、米国と対等に交渉することができた。これこそ、中国が国際社会の一員として活動する意欲を表明し、また米国を始めとする国際社会に受け入れてもらう条件をより多く揃えたという証左となろう。

しかし、原則問題に関しては、江沢民はまったく米国に譲歩しなかった。台湾問題について、米国から台湾独立を支持しないという保証を得たし、チベット問題および人権問題に関しては、中国の主張をし続けた。彼の持論は、歴史、文化、経済発展の段階は異なり、米中両国間に異なる認識があっても当然なことであるが、これらの問題は内政問題で、中国の国情に基づいて対応しなければならないと主張し、外国の干渉には反対した。江沢民は民主化も実行するが、米国式ではなく、中国式で実行しなければならないと認識し、またそのように説明した。これらの説明も理性的なもので、反駁する余地はない。

もちろん、国家間の親しい関係は排他的なものになってはならない。中国の指導部は「遠交近攻」（遠い国と友好交流し、近い国に攻撃する）の外交手段を取ることはすでに時代遅れの考え方だと認識しているはずである。したがって、「親米」が「嫌日・嫌口」などには決してならないであろう。冷戦時代と違って中国はもはや孤立した存在ではなく、中国国内の安定と発展は国際情勢の安定、平和共生の発展と緊密に関連しているようになっているからである。今回の訪米で、江沢民を始めとする中国指導部が「親善外交」はこの両者の紐帯であることを認識し、これから国際舞台で積極的に中国の果たすべき役割を担うことが大きく期待されている。

世界平和は机上の空論であってはならず、達成されなければ意味がない。平和外交も世界平和も、まずその国および国民に対する親近感から芽生えてくる。江沢民は毛沢東時代において不可能であったこと、鄧小平時代にできなかったこともこれから成し遂げるといような希望を持たせてくれる。この意味で、彼は毛沢東と鄧小平を超える中国のニューリーダーになる可能性があるといえよう。彼の指導下で、中国は更に「農耕民族の閉鎖性」から「工業社会の開放性」へ変化し、上層部だけではなく、中国の国民層も理性的に外部世界に対する親近感を持つようになることが期待できるだろう。（異文研助手、Research Associate at Intercultural Communication Institute）

参考文献

産経新聞外信部 監訳 『CIA秘密研究 中国人の交渉術』（文藝春秋、1995年）

Taiwan Today News Network, 「華訊新聞網」
(<http://w3.ttnn.com/>)

Report on the 8th Conference of European Association for Japanese Studies: The Status Quo and the Future of Japanese Studies ヨーロッパ日本研究学会第8回大会報告

— 日本研究の現状と未来 —

Judit Hidasi

昨年の八月末、我がハンガリー外国貿易大学で、ヨーロッパ日本研究学会の総会が開かれた。総会が中・東欧で開催されたのは、今回が初めてである。開会式には日本文学の翻訳でも有名なゲンツ大統領が出席し祝辞を述べた。"日本文学の新しい波への小説家の対応"と題する大江健三郎氏の基調講演で幕を開けた大会は、八つの分科会（都市と環境、日本語・日本語教育、文学、芸術、人類学・社会学、経済、歴史・政治・国際関係、宗教）に分かれ、四日間の日程で発表と活発な質疑応答が展開された。参加者は、世界四十カ国から五百名にのぼった。全ての分科会に日本からのゲストスピーカーを迎え、講演が行われた。発表者はヨーロッパに限らず日本を含むアジア、アメリカ、オーストラリアなど世界各地の研究者で、大学院生など若手の研究者の報告も多く、日本研究の裾野の広がりが感じられた。中でも多くの聴衆を集めたのが三十八の報告、講演が行われた言語学・日本語教育の分科会であった。様々なテーマで発表が行われたが、なかでもマルチメディアを使ったビジネス日本語教育の報告やPLDを用いた日本語教授法など、新しい可能性を示してくれ、非常に刺激的なものだった。

It is commonly believed that music is the thing that connects people of different cultures and countries. Scholars and representatives of 41 countries gathered in the capital of Hungary, Budapest for a conference between 27-30 August 1997 which proved that Japanese studies can also connect people from different continents and from different backgrounds.

The 8th conference of the European Association for Japanese Studies was a milestone in the history of this scholarly organization for three reasons:

- (1) It was the first time that EAJS was holding its triennial meeting in Eastern Europe. EAJS was established in 1973, but it long remained a mainly West European organization. Its previous triennial conferences took place in Zurich (1976), Florence (1979), The Hague (1982), Paris (1985), Durham (1988), Berlin (1991) and Copenhagen (1994). Over the last few years, however, it has attracted more and more members from Eastern Europe (presently over 110 members from this region). Hungary felt particularly honoured for being selected to host this conference.
- (2) It was the first occasion that we could greet a Nobel-prize winner as the keynote speaker of

this academic gathering. In his opening lecture "A Novelist's Response to the New Wave of Japanese Studies" Oe Kenzaburo drew attention to the importance of comprehensive discussion and universal theory in all areas of cultural studies, including Japanology.

(3) The plenary session was addressed by the president of Hungary. Arpad Goncz, a famous literary translator and writer in his civil life, gave first hand reflections on Japanese literature.

The host-institution of the conference was the College of Management and Business Studies, in particular its Institute for Oriental Communication and Further Training. The campus provided a convenient venue for the section-meetings, discussions, book exhibitions and formal or informal exchange of ideas. The over 500 participants of the conference (the 142 Japanese attendants outnumbered representatives of any other country) presented 202 papers in the sections and poster sessions. A wide range of topics was covered in the sections, each convened by two prominent scholars of EAJS.

1. Urban and Environmental Studies
2. Linguistics and Language Teaching
3. Literature
4. Visual and Performing Arts
5. Anthropology and Sociology
6. Economics, Economy and Social History
7. History, Politics and International Relations
8. Religion, Thought and the History of Ideas

Most sections had invited outstanding Japanese scholars as guest-speakers (M. Tokugawa—Gakusyuin University and O. Endo—Bunkyo University; H. Ii—Osaka University; I. Kumakura—National Museum of Ethnology, Osaka; T. Yoneyama—Hoso Daigaku; T. Yuzawa—Gakusyuin University; T. Tanaka—Hitotsubashi University; K. Miyamoto—Musashi University).

The topic of "The Future of Japanese Studies" was elaborated on the final day's panel discussion. Panelists from Australia, France, Great Britain, Germany, Hungary, Turkey and the United States gave reports on the status-quo of Japanese studies in their respective countries, and discussed future perspectives. Although practices and views differ greatly from country to country, all agreed that main-stream Japanese Studies centers in the West and in Japan should more intensively than before study each others' activity in order to establish a more effective and realistic approach to the develop-

ment of Japanology. Newly emerging academic institutions in the countries of Eastern Europe might mean on the other hand a new potential especially as far as methodology is concerned.

Even in the age of new communication technologies it is hard to keep track of the recent developments, current research activities and achievements in the ever increasing variety of subjects and disciplines related to Japan. Hence, the triennial conferences of EAJS offer an excellent opportunity to meet colleagues from all over the world, to discuss topics of mutual interest, to promote interdisciplinarity in Japanese Studies. The next conference will take place in August 2000 in Lahti, Finland. (Professor at College of Management and Business Studies, Budapest, Hungary—Former College for Foreign Trade)

ヨーロッパ日本研究学会 第8回大会に参加して Report on the 8th Conference of the EAJS

小松 照幸 (Komatsu, Teruyuki)

This is a brief report on the 8th Conference of the European Association for Japanese Studies (EAJS) in Hungary I attended in the summer of 1997. In one of the sessions of the conference, 23 presentations on Japanese studies were made with anthropological and sociological approaches.

この大会は3年に一度ヨーロッパで開催されている。私にとっては、海外の学会で日本研究者と一堂に会し親しく議論をすることも、東欧への旅もはじめての経験であり、二重の意味で大変有意義であった。そもそも日本研究は対象分野が広く、また研究方法も学際的である。この大会では政治、経済、文学、芸術、言語、文化、社会など8つの分科会があり、私のもっぱらの関心領域は「日本人の行動様式」にあるので、特に「第5分科会 (Anthropology & Sociology)」へ集中して参加した。

この分科会は、実は「日本の人類学研究会」(JAWS: Japan Anthropology Workshop)という組織が研究活動の母体となっている。JAWSは1984年オックスフォードの「ニッサン日本研究所」で発足し、97年度の会員は227名(24ヶ国)である。JAWSにとって、今回は第10回会議となるが、テーマは「日本の外の (にある) 日本: Japan outside Japan」で、ゲストスピーカーは米山俊直氏(放送大学)、司会者は別府春海氏(スタンフォード大学/京都文教大学)とシル

ピー・アングイス氏(パリ大学)であった。

分科会では次のような課題で23の研究発表が行われた。「日本の国際化にともなうビジネスマンの海外での行動：シンガポールの例」、「日本的ユートピア：ヨーロッパのヤマギシ会」、「海外における日本の食文化：オランダの例」、「ドイツにおける創価学会」、「日本の映像芸術」、「ピエンナの日本武道館」、「海外の日本的オリエンタリズム」、「フランスの日本週間：東の間の（はかない）文化創造」、「韓国における日本イメージと西欧イメージ」、「韓国における現代日本のポピュラーカルチャー」、「イギリスのパブにおける日本のカラオケ」、「アメリカの日系企業：異文化交流と文化創造」、「外人としての日本女性：囲まれた人生か自由な精神か」、「香港の日本マンガ：文化人類学的歴史について」、「香港の日本人：尖閣諸島問題とナショナリズムの高まりの中で」、「マレーシアの家庭での日本人留学生」、「タイとフランスにおける日本の多国籍企業」、「ドラエモン海外へ行く：日本のソフトパワー」、「カメラレンズを通した日本人：グローバル・アートとして」、「ホンコンで働く日本人女性」、「国際化・信頼・アイデンティティー：日本人は本当に国際人となりうるか」。

この分科会の研究視点である‘Japan outside Japan’は、日本の国際化が大きく進展する中で、確実に変化しつつある人の国際移動と価値観の変化を検討する上で、いずれも興味を引く研究発表であった。伝統文化の継承、激しく変化する現代社会と現代人の意識構造の変化や生きざまなどについては、日本人の国内と海外での行動様式を比較検討することによって、社会変化の先端的現象として把握し得るであろう。日本という社会を巨大なジグソーパズルと考えると、それぞれの研究発表はより統合された理解を得るためのステップとして評価できよう。しかし、なお、部分的イメージであるとの感を免れないのは、なぜだろうか。

日本文化のみならず、現代社会・文化の理解には3層構造からなる日常生活文化 (everyday life culture) という概念の重要性が石井敏氏 (獨協大学) により明示されている (「異文化理解の必要性と基本的考え方」1994年)。顕在層は物質文化であり、中間層は行動文化、そして潜在層としての精神文化である。この3層構造の複雑な絡みから、行動文化の諸層を整理していくことが重要であろう。

いずれにしても数百名にのぼる研究者と3日間、親しく議論をし、それぞれ素晴らしい人たちと知り合う機会を得たことが最大の収穫であった。次回のJAWS大会は、1999年3月10日から14日までの日程で、大阪の国立民族学博物館で開かれる。テーマは‘Popular Culture and Mass Media in Japan.’ (名古屋学院大学助教授、Associate Professor at Nagoya Gakuin University)

研究所からのお知らせ

講演会報告

第38回異文化コミュニケーション講演会が1997年11月14日(金)、東京(於：神田外語学院)で開催された。神田外語大学学長の石井米雄氏が「19世紀中葉のシャムにおけるコミュニケーション・ギャップ——3通の修好通商条約のテキストの比較から——」という演題のもと、約60名の参加者を前に、言語を媒介とした際に生じるコミュニケーション・ギャップについて、熱弁をふるった。

氏は、まず‘communicate’という言葉の由来と定義について触れ、人間のコミュニケーションでは、言葉の果たす役割が大きいとし、コミュニケーションの道具としての言語は、各文化の中で作り上げられ、発展していくため、言語にはその話し手の文化が反映されていると指摘した。そこで、他言語へ翻訳すると、どうしても‘ずれ’が生じてしまうとし、一例として新約聖書のヨハネ伝を挙げた。このヨハネ伝の中には「はじめにことばありき」というくだりがあるが、古い日本語訳には「ことば」という字に「道」という字が当てられているものがある。「道」という字が当てられた理由としては、中国語訳がこの字を使っていたという理由もあるが、これ以外に、「道になかった」「道にはずれた」などと言うように、「道」という言葉を用いた方が、日本人にとっては神様のことであると分かりやすいため、この翻訳者は、なるべくずれを少なくしようと、苦心の末に「道」という字にルビを符って「ことば」としたと考えられるという。言葉を媒介にしてコミュニケートする時には、言葉の依って立つ文化や歴史について考える必要がある、という指摘であった。

次に、19世紀にタイが締結した修好通商条約のテキストの比較から浮かび上がってきた翻訳の問題点について、当時の東南アジアの歴史的背景を紹介しつつ語った。1855年に、当時のシャム王国は、大英帝国と修好通商条約を結び、その条約文はタイ語と英語の二ヶ国語であらわされているが、同氏が詳細にそれらを比べてみたところ、同一のものでありながら、タイ語の条文にはシャム王国の論理が、英語の条文には、大英帝国の論理が明確に反映されているのが窺えたという。例えば、英語の条文には、英国国民はタイでキリスト教を信仰する権利と、教会を建てる権利を有する、と記されているが、タイ語では、シャムの国王がそれをお許しになった、と翻訳されているという。近代的国際法秩序に基づいた条約の締結は、相互主義が原則であるはずのところ、タイ語の条文の主語は、あくまでもシャム王国の国王であり、まるで、タイの国内法の文脈のようである、という。翻訳言語自体が、それぞれの国の文化に基づいているため、二つの言語で翻訳された

条文には、ずれが生じてしまっている、ということであった。さらに、英語でいうところの‘siam’一語をめぐる、両国語の意味するところが異なっているという指摘が、実際のテキストの該当箇所の提示とともに、なされた。

次に、この条文とは対照的な例として、1年後の1856年にフランスとタイの間で締結された条約が紹介された。この条約に関しては、フランス語とタイ語の翻訳が完璧になされているという。そこには、当時、シャム王国で布教活動を行っていたフランス人神父の果たした役割が大きかったという。タイ語をほぼ完璧にマスターし、両文化を熟知したこの神父の翻訳によってギャップは最小限に留められた、ということであった。

最後に、氏は、以上のような100年以上前に起こった翻訳のギャップは、言葉を媒介とした異文化コミュニケーションを行う以上、本質的には現在でも不可避の問題であるとした上で、そのギャップの質を考えていくことが必要であると主張した。更に、日本の国際化を推進するためにも、複数文化間のコミュニケーションが、直流だけにとどまらず、交流となるよう、このコミュニケーション・ギャップという問題をより深く考えていかなければならないと述べ、講演を締めくくった。その後、参加者との質疑応答が行われ、活発な意見交換が繰り広げられた。(飯高智美 記)

寄贈図書一覧

1995年5月より当研究所に寄贈していただいた図書の一部を以下にまとめました。図書の他にも多くの論文、紀要、雑誌、ビデオ等をいただいております。スペースの都合で掲載できませんが、当紙面を借りて心より御礼申し上げます。これらの図書や資料は、閲覧室に独自の分類方法で保管しておりますので、ご来訪の節には、自由にご利用下さい。

- 中江要介 他『アジア人の戦後50年 共通認識を求めて』亜細亜大学アジア研究所、1996。
柳谷謙介『アジアの交流 世界と文化のダイナミズム』亜細亜大学アジア研究所、1996。
川喜田二郎 他『アジア発展の奔流 変貌する市場と民衆』亜細亜大学アジア研究所、1996。
多田道太郎『遊びと日本人』文藝春秋社、1974。
近江誠『頭と心と体を使う英語の学び方』研究社出版、1995。
松本茂『頭を鍛えるディベート入門 発想と表現の技法』講談社、1996。
古田暁 監修、石井敏 他著『異文化コミュニケーション』(改訂版)有斐閣、1996。
石井敏 他編『異文化コミュニケーション・ハンドブック 基礎知識から応用・実践まで』有斐閣、1997。
渡辺文夫『異文化接触の心理学』川島書店、1995。

- 近江誠『英語コミュニケーションの理論と実際 スピーチ学からの提言』研究社出版、1996。
水谷謙吾 監修、早瀬光秋 著『英語スピーチ入門』学書房出版、1994。
山本真理子 他『オーラ・ジャンボ・マロエレレイ アジア・大洋州編』WAA、1990。
近江誠『オーラル・インテグレーション入門 英語の深い読みと表現の指導』大修館書店、1988。
梶田正巳『教えること学ぶこと』有斐閣、1991。
森岡ハインツ、加藤泰彦 編『海外言語学情報』大修館書店、1996。
長田満江 編著『海外職業訓練ハンドブック バングラデシュ』海外職業訓練協会、1995。
徳永達己 編著『海外職業訓練ハンドブック タンザニア』海外職業訓練協会、1995。
三浦清彦 編著『海外職業訓練ハンドブック タイ』海外職業訓練協会、1995。
関口礼子『カナダハイスクール事情』学文社、1997。
田中美知太郎、松平千秋『ギリシア語入門』(改訂版)岩波書店、1951。
御手洗昭治『黒船以前 アメリカの対日政策はそこから始まった』第一書房、1994。
橋本・オダリ・ますみ 編著『海外職業訓練ハンドブック ケニア』海外職業訓練協会、1996。
田部井正次郎『コンベンション 新時代のためのガイド』サイマル出版、1997。
女性学研究会『女性学研究第1号 ジェンダーと性差別』勁草書房、1990。
橋本敬造 他『自然観の変遷 宇宙・物質・生命』学術図書出版社、1990。
箕輪成男『出版学序説』日本エディタースクール、1997。
御手洗昭治『新国際人論 トランス・カルチュラル・メディアエター時代への挑戦』総合法令出版部、1996。
御手洗昭治『絶対の英語勉強法』中経出版、1997。
井村哲郎『戦前期アジア関係日本語逐次刊行物 目録』アジア経済研究所、1995。
鳥飼玖美子『大学英語教育の改革』三修社、1996。
大鹿譲 他『体験的異文化コミュニケーション』清流社、1995。
早川東三 他『日独口語辞典』朝日出版、1985。
北嶋典生 編『日本中世の唯識思想』龍谷大学仏教文化研究所、1997。
祖父江孝男、梶田正巳 編著『日本の教育力』金子書房、1995。
濱口恵俊『日本文化は異質か』日本放送出版協会、1996。
阿部正路『箸のはなし はしと食の文化誌』ほるぶ出版、1993。

中垣長睦『パトスの旅へ 青年海外協力隊への道』
国際協力出版会、1992。

平松茂雄 他『東アジアの乱気流 安定への道を探る』亜細亜大学アジア研究所、1997。

大崎正瑠『ビジネス・コミュニケーション論』
西田書店、1995。

平井一弘『福沢諭吉のコミュニケーション』
青磁書房、1996。

長銀総合研究所 編『海外職業訓練ハンドブック
ベトナム』海外職業訓練協会、1997。

細井忠俊、パーウィック妙子『短期語学研修必携
ホームステイ&留学のための英会話』アルク、
1993。

(財)科学技術広報財団『未来産業技術VOL. IV』
(財)科学技術広報財団、1988。

中野頼明 編著『海外職業訓練ハンドブック
メキシコ』海外職業訓練協会、1997。

佐々木輝美『メディアと暴力』勁草書房、1996。

長尾昭哉『やさしい統計学の本』同文館、1997。

西川長夫、宮島喬 編『ヨーロッパ統合と文化・民
族問題』人文書院、1995。

小草(池上貞子、守屋宏則訳)『日本留学1000日』
東方書店、1989。

Fromm, Erich (懸田克躬訳)『愛するということ』
紀伊國屋書店、1996。

Neustupný, J. V. 『新しい日本語教育のために』
大修館書店、1995。

Frederick, Howard H. (川端末人 他訳)『グロー
バル・コミュニケーション』松柏社、1996。

Moser, Caroline O.N. (久保田賢一、久保田真弓訳)
『ジェンダー・開発・NGO 私たち自身のエンパ
ワメント』新評論、1996。

Byham, William C. (梅島みよ 訳)『將軍マネジメ
ント 北米における日系企業』悠々社、1994。

Butler, Pamela E. (山田真規子 監訳)『女性の自
己表現術 ノーと言える自分づくり』創元社、
1996。

McNamee, Sheila, Gergen, Kenneth J. 編(野口
裕二、野村直樹 訳)『ナラティブ・セラピー
社会構成主義の実践』金剛出版、1997。

Nichols, Ralph G. 他(井上恒夫 訳)『対話と説得
の技術』産業能率大学出版部、1974。

Wallis, Roger, Malm, Krister (岩村沢也 他訳)
『小さな人々の大きな音楽』現代企画室、1995。

Shakabpa, Tsepon W.D. (貞兼綾子 監修、三浦順子
訳)『チベット政治史』亜細亜大学アジア研究
所、1992。

Speech Communication Association. 1995-
96 *Speech Communication Association Direc-
tory*. VA: Speech Communication Association,
1995.

Park, Myung S. *Communication Styles in
Two Different Cultures: Korean and American*.
Seoul: Han Shin Publishing, 1979.

Clausen, Soren et al., eds. *Cultural Encoun-
ters: China, Japan, and the West*. Denmark:
Aarhus University Press, 1995.

Liska, Jo and Cronkhite, Gary. *An Ecological
Perspective on Human Communication
Theory*. Fort Worth: Harcourt Brace Company,
1995.

Korean Overseas Information Service. *A
Handbook of Korea*. Seoul: Samhwa Printing,
1993.

Wright, Chris. *Korea its History and Culture*.
Seoul: Korean Overseas Information Service,
1994.

Sato, Ayako. *Performance Patterns of the
Japanese People*. Tokyo: Kinseido, 1996.

Trompenaars, Fons. *Riding the Waves of Cul-
ture*. London: The Economist Books, 1993.

Nishiyama, Kazuo. *Strategies of Marketing to
Japanese Visitors*. MA: Ginn Press, 1989.

Bormann, Ernest G. *Theory in the Commu-
nicative Arts*. NY: Holt, Rinehart & Winston,
1965.

Condon, John and Kurata, Keisuke. *What 's
Japanese about Japan*. Tokyo: Shufunotomo,
1974.

Holmes, Henry and Tangtongtavy, Suchada.
Working with the Thais. Bangkok: White Lotus,
1996.

Hosokawa, Bill. *Old Man Thunder: Father of
the Bullet Train*. CO: Sogo Way, 1997.

紀要『異文化コミュニケーション研究』 第10号発刊

『異文化コミュニケーション研究』第10号は4月に刊
行予定です。ご希望の方には実費でお頒けいたしま
す。詳しくは4月以降お問い合わせ下さい。

収録論文一覧

Teaching Communication or Teaching
Interaction?

Neustupný, J. V.

ハイブリッド文明の構築に向けて

染谷臣道

異文化理解のダイナミックス——留学生のホームス
テイ体験から——

バクニック、J.

外国人社員と日本人社員——日本語によるコミュニ
ケーションを阻むもの——

清ルミ

日本語学習者に向けたビデオ・カルチャー・アシミ
レーター作成

三角友子

**Icebergs and Islands: Metaphors and Models
in Intercultural Communication**

Eagle, S. & Carter, J.

日本人の非言語コミュニケーションに関する英文文
献(1966-1997)とその分析——その1

石井敏・三池賢孝

『異文化コミュニケーション研究』

論文募集

『異文化コミュニケーション研究』第11号の論文を
募集しています。提出期限は8月31日です。投稿規定
は紀要の最終頁、及び、当研究所のホームページ
(<http://www.kuis.ac.jp/daigaku/ibunken>)に記載
されています。

第8回異文研夏期セミナー

第8回目の今年度は、主として、教育実践方法と
地域文化研究についてのワークショップを3つずつ
設け、日本語教育、コミュニケーション教育、アジ
ア研究などの分野でプログラムを組む予定です。開
催案内は5月中旬に発送の予定です。ご希望の方は
5月以降、当研究所まで郵便またはファックスにて
お申し込み下さい。尚、研究発表は6名まで可能で
す。ご希望の方は4月30日(木)までに、発表タイト
ルと要旨(200~300字)を異文研夏期セミナー係ま
でお送り下さい。

開催日:1998年7月31日(金)~8月2日(日)

テーマ:異文化コミュニケーションの理論と実践
——多言語・多文化社会を迎えて——

会場:British Hills(福島県)

申込締切日:1998年6月20日(土)

学会・研究会予告

社団法人パフォーマンス教育協会

第11回コンベンション

日時:1998年3月9日(月)午前10:30~午後5:45

テーマ:「場」と「かかわり」から観る、人間関係
づくりのパフォーマンス

会場:山之内製菓(株)(東京都中央区)

連絡先:社団法人パフォーマンス教育協会事務局

〒160-0004 新宿区四谷4-30-18

第2テイケイビル2階

Tel:03-3226-3363 Fax:03-5379-5190

1998年日本コミュニケーション研究者会議

開催日:1998年5月16日(土)・17日(日)

テーマ:21世紀の日本におけるコミュニケーション
教育

会場:南山大学(名古屋市)

連絡先:日本コミュニケーション研究者会議事務局

南山大学外国語学部英米科 岡部朗一

〒466-0824 名古屋市昭和区山里町18

Tel:052-832-3111 Fax:052-832-5330

異文化間教育学会第19回年次大会

開催日:1998年5月30日(土)・31日(日)

シンポジウム:日本の学校にいかなるコミュニケー
ション教育が必要か

特定課題研究:(1)異文化間教育の実践的展開:地
球市民教育と教員養成;(2)異文化間教育
の実践的展開:留学生交流と支援システム
の最前線

会場:神田外語大学(千葉市)

連絡先:大会準備委員会事務局 神田外語大学異文
化コミュニケーション研究所内 久米昭元

日本コミュニケーション学会第28回年次大会

開催日:1998年6月20日(土)・21日(日)

会場:日本大学商学部(東京都世田谷区)

研究発表応募締切日:1998年3月15日(必着)

完結論文、あるいはタイトルとアブストラ
クト(日本語のアブストラクトは800字、英
語のアブストラクトは200語以内)を提出。

連絡先:川島彪秀(学術局長)

日本大学文理学部英文学科

Tel:03-3329-1151(内線)4500又は、4506

Fax:03-3303-9899

1998年SIETAR世界大会

開催日:1998年11月19日(木)~11月24日(火)

テーマ:対話を通して21世紀のビジョンを創る——
多様性とグローバリゼーション;弱者のエン
パワーメント;グローバル組織のベストプラ
クティス——

会場:11月19日~23日 麗澤大学(千葉県柏市)

11月24日 有楽町朝日ホール

研究発表申し込み締切日:1998年2月28日(土)

連絡先:1998年SIETAR世界大会事務局

〒100-0011 東京都千代田区内幸町2-2-1

日本プレスセンタービル4階

ジャパン コンベンション サービス(株)内

Tel:03-3508-1213 Fax:03-3508-0820

E-mail:sietar@convention.co.jp

**The Twelfth Summer Workshop for the
Development of Intercultural Course-
work at Colleges and University**

Date: July 15-24, 1998

Place: University of Hawaii

For more information, please write to:

Dr. Richard Brislin

University of Hawaii, College of Business Adminis-
tration/MIR, Honolulu, Hawaii 96822

Tel: 808-956-8720 Fax: 808-956-9685

Email: brislinr@busadm.cba.hawaii.edu